

中国のほんの話(24) 『藍』色物語 蔭山 達弥

香港の衛星テレビ局「フェニックス・チャイニーズチャンネル（鳳凰衛視、日本ではスカイパーフェクトテレビ724chで放送中）」のドキュメンタリー番組『唐人街』（日曜日夜に放送）は、海外で暮らす華人のありのままを撮影したもので、5大陸40余りの華人が集中している国家を回って取材が続けられている。計画では2年間、全100回を制作する予定である。第1回放送は、2003年1月19日に放送された。この番組は「鳳凰衛視」で視聴率が最も高い番組の一つで、昨年12月28日には中国記録フィルム学術賞特別賞を受賞した。

この番組で昨年7月に放送されたのが、表題にある『藍』色物語である。

雑誌をついに出版した

私たちの「子供」が生まれたのだ

私たちは彼女に『藍』と名づける

それは大空と海原の景色だからだ

『藍』は中日両国語による大型文芸雑誌だ。4年前、京都嵐山で、文学に対する愛好から、数人の中国人留学生在が自分たちの文芸雑誌『藍』の発刊を決めた。日本ではこのような雑誌は同人雑誌と呼ばれ、普通、経費不足の状況に直面して、「同人雑誌は3号と続かない」と言われている。『藍』は既に12号（11・12合併号）まで出版されている。日本で唯一の中日両国語の文学雑誌は「純文学」の理念を堅持し続けているため、読者は非常に限られており、台所は非常に苦しい。経費は数名の編集者が自ら得た収入と小額の会費で維持されている。

こんなに苦しいとは思ってもよらなかった

精力はない、お金はもっとない

純文学は本当に死んでしまうのだろうか

4年間で、編集委員会のメンバーで残っているのは燕子さん一人となってしまった。燕子さんは番組の中で言う。「みんなはいつもこの雑誌を

如何にして存続させていくかというのを考えている。まず生きながらえてこそ発

展できるのではないですか。私の収入は少なく、言うのもお恥ずかしいかぎりです。多くの『藍』の眼に見えないところはすべてお金がかかる。これらのお金は私たち自身の少ない給料では全く足りません。実際、1号出す毎にそれが最後の1号だと思って出版しています。そのように聞くととても悲壮のようですが、確かにその通りです。…私たちみんなの考えは頑張ることです。ずっと走って、私たちの走らなければならない道はもう終わってしまったのかと思います。私たちにもそのような予感があります。…『藍』は風の中にあります。答えも風の中にあります。どの号もそれが最後の1号だと思って、真面目に成し遂げなければならない。」

番組『『藍』色物語』の後半、雑誌の印刷所がある富山で開かれた交流会で燕子さんが参加者にのべた言葉は見る者の心を打つ。「空は青い。海も青い。昔、旧ソビエトの宇宙飛行士であったガガーリンは宇宙から地球を見たとき、すべて青色でした。こんなに美しい地球なのに、人類は何故戦争をし、衝突するのか。私たちも彼の感動に感動し、日中両国の間に文学を通して両国の架け橋になりたいと願っている。今後とも、どうか温かい目でご支援お願いします。」

2002年4月に刊行された『藍』6号の目次を見ると、日本語部分では1970年代以降に生まれた詩人の集まりである「下半身」グループや2004年の中国のお正月映画『携帯電話』の原作者、劉震雲の小説の翻訳などが掲載されていて、啓発される。また、最新号は昨年来日した香港の文学者、也斯が返還後の香港の文学の現状を語っている。一人でも多くの人に一読を勧めたい。『藍』は京都朋友書店、大阪東方書店等で取り扱っている。

かげやま たつや（助教授・中国文学）

